---------- 大会プログラム ----------

2024年3月3日(日)
会長挨拶　田中 守

シンポジウム
「ハンドボールアナリストの行方」

パネリスト：
嘉数 陽介（日本ハンドボール協会，TOKYO2020女子日本代表アナリスト）
高橋 豊樹（トヨタ車体BRAVEKINGSアシスタントコーチ/アナリスト，男子日本代表アナリスト）
芳村 優太（大同特殊鋼Phenixアナリスト，男子U19日本代表監督）
コーディネーター：
市村 志朗（東京理科大学，日本ハンドボール協会情報科学委員会委員長）

一般発表（1）　演題番号1～7　座長：仲田 好邦（名桜大学）

2024年3月4日(月)
基調講演
「ハンドボール競技における監督の情況把握能力の特徴－スポーツ運動学的な視点から－」
講演者：藤本 元（筑波大学）

一般発表（2）　演題番号8～13　座長：小俣 貴洋（京都先端科学大学）

各表彰

---------- 大会実行委員 ----------

委員長：船木 浩斗（中京大学）
委 員：栗山 雅倫（東海大学）・下川 真良（大阪体育大学）・明石 光史（大阪経済大学）

会長挨拶

会　　長
田中 守（福岡大学）

今季は暖冬と言われながらも、寒暖差が非常に大きくなっている師走を迎えました。4 年続いた新型コロナウィルス感染症も感染症レベル二類から五類へ移行し、社会や経済は New Normal な日常で動いています。

様々な制約がある中での対面開催による新鮮な空気感を味わった昨年から、今回は従来通りの日本ハンドボール学会第 12 回大会を初めて九州地区の福岡大学で開催することになりました。2 期 6 年に及ぶ学会会長を仰せつかり、皆様方のご協力により何とか最終年度を迎えられたことに安堵と感謝を申し上げます。その最終を本学福岡大学で迎えられますことを大変嬉しく思っています。開催に向けて準備を進めてくださっている船木浩斗学会大会実行委員長（中京大学）、仲田好邦セミナー実行委員長（名桜大学）をはじめとする各実行委員の皆様、基調講演者やシンポジストなどの調整にご尽力いただいている市村志朗理事長（東京理科大学）、そして会場提供のみならず大会準備全般にわたりご尽力いただいている森口哲史総務委員長（福岡大学）に感謝申し上げます。

今回の基調講演は、女子日本代表チームのコーチ経験を持ち、またシャトレーゼ監督、そして現在は筑波大学男子監督として数々の実績を残されている藤本　元准教授に「球技チーム監督の情況把握能力―運動学的な視点から―」をテーマにご登壇いただきます。またシンポジウムは、「ハンドボール界におけるアナリストの行方」をテーマに、日本協会情報科学委員長の市村志朗氏、女子日本代表アナリストの嘉数陽介氏、トヨタ車体アナリストの高橋豊樹氏、大同特殊鋼アナリストの芳村優太氏にご登壇いただき、他競技でも活躍するアナリストの位置づけ等も含め、ハンドボール界でのアナリストの貢献と今後の行方等について議論、提言いただく貴重なシンポジウムです。さらに、学会初日の午前中にコーチングセミナーを企画し、男子日本代表監督の経験を持ち、今季の日本リーグでとても勢いのあるトヨタ紡織九州を指揮している岩本真典監督に、「Impossible is nothing～不可能なんてない～」をテーマにコーチングコンセプトとトレーニング法を紹介していただきます。学会員以外の多くの指導者にもご案内する予定です。

本学会の目的である「ハンドボールに関する科学的研究及び会員相互の交流を促進し、ハンドボールの普及発展に寄与する知を創造すること」を目指し、現場で実践的指導やサポートに携わる多くの方々も交えた活発な議論ができる大会にしていただければ幸いです。

基調講演

ハンドボール競技における監督の情況把握能力の特徴
－スポーツ運動学的な視点から－

講演者：藤本 元（筑波大学）

球技では，ボール，味方選手や相手選手の移動，相手選手のさまざまな阻止行動，ゲームのテンポ（リズムの変化）によって場面がたえず急転する．そのため，こうした情況に対応しなければならないハンドボール競技では，情況把握能力が決定的な意味をもつことになる．情況把握能力とは，競技スポーツ現場で一般に「ゲーム感覚」と称されるような，ゲームの流れを私の運動感覚身体が感じ取り，即座に最適な動きかたを出現させる能力である．

ハンドボール競技の監督は，実際の試合において，目の前で展開されている「ゲームの流れ」を読み解き，未来における「ゲームの流れ」を先取りしながら，自分たちに有利な方向にチームを導くための具体的な対応策を，そのつどその場で決断できなければならない．今回，テーマとして取り上げるのは，試合の最中に「ゲームの流れ」を読み解きながら，対応策を即座に決断できる直観的な分析能力についてである．この「情況把握能力」は，悪い流れに入りそうな気配を感じ取る「気配体感能力」や，その情況においてどのような対処を行うべきかを即座に見出す「即興能力」，またその選手たちの身になってどう動けば良いのかを判断する「代行能力」など，さまざまな動感能力が複雑に絡み合っており，その能力については研究が遅れている．

一方，ハンドボール競技においてチーム戦術行為を機能させるためのチームづくりの方向性には，チーム戦術構想がグループや個人を拘束する「拘束性」と，グループや個人の相互作用によってチーム戦術構想としての秩序が生み出される「創発性」という，2 つの方向性があると考えられる．「拘束性」と「創発性」のどちらの方向性を志向するかによって，試合において監督が采配するときにどのような意識を働かせているのかということ，すなわち監督の動感志向性には，大きな違いが生まれてくると考えられる．

そこで，私が指導した「拘束性」と「創発性」のそれぞれを志向したチームにおいて，私が試合中に情況を把握する際に，何を意識しているのかという「意識内容」と，どのように意識しているのかという「意識作用」について分析した研究を参照しながら，ハンドボール競技における監督の情況把握能力の特徴についてお話しさせていただきたい．

＜略歴＞
筑波大学体育系准教授・博士（コーチング学）
1970 年 大阪府生まれ
日本ハンドボール学会理事
筑波大学男子ハンドボール部 監督
日本スポーツ協会公認ハンドボールコーチ 4 資格
デンマークハンドボール協会エリートコーチ資格

シンポジウム

ハンドボールアナリストの行方

パネリスト：
嘉数 陽介（日本ハンドボール協会，TOKYO2020 女子日本代表アナリスト）
高橋 豊樹（トヨタ車体 BRAVEKINGS アシスタントコーチ/アナリスト，男子日本代表アナリスト）
芳村 優太（大同特殊鋼 Phenix アナリスト，男子 U19 日本代表監督）

コーディネーター：
市村 志朗（東京理科大学，日本ハンドボール協会情報科学委員会委員長）

スポーツの世界では，選手のパフォーマンスや戦術を分析することの重要性が年々高まっています．ハンドボールも例外ではなく，日本においても，日本代表チームのみならず，大学生チームや日本リーグチームにおいても，パフォーマンスアナリスト（ゲームアナリスト）の専門家が活躍する場が増えてきています．

本シンポジウムでは，異なる経歴を持つ 3 名の専門家をパネリストとしてお招きし，彼らの所属チームでのアナリスト経験に基づく競技力向上の取り組みについて紹介していただきます．また，パフォーマンスアナリストがハンドボールの世界で果たすべき役割，コーチとの違いとその相互関係についても，議論を深めていきたいと考えています．

そして，本シンポジウムの最終なゴールとして，ハンドボールにおけるパフォーマンスアナリスト（ゲームアナリスト）がどのようなキャリアパスを経て，どのような道へ歩んでいくことができるのかについて模索します．

一般発表

機械学習によるイベント予測に基づくハンドボールのチーム守備の評価

小林　蓮（名古屋大学大学院情報学研究科）藤井　慶輔（名古屋大学）

計測技術の発達によって，様々なスポーツにおいて選手を定量的に評価する研究が行われている．一方で，ハンドボールの試合の解析においては，守備の分析は人手でラベルをつけるのが難しいことと，研究自体がそもそも少ないことが課題とされている．そこで本研究では，ハンドボールにおいて守備のイベントを細分化して定義・抽出し，機械学習を用いたイベント予測に基づくチームの守備評価指標を提案する．本研究は，より優れた守備戦術の開発や，指導する際の指標に役立てることができる．また，守備評価指標は他のスポーツにも応用が可能であり，より広い範囲での研究につながることが期待される．本研究では，Kinexon 社が提供する Handball-Bundesliga　(HBL) 2019/20 シーズンの 5 試合分（5 分×5 シーケンス×5 試合 = 125 分）のイベントデータ（パス・シュート等の行動ラベル，時刻，結果等）とトラッキングデータ（20Hz で記録された選手全員とボールの座標）を分析に用いる．本研究では，得点予測に基づく VAEP のアイデアを参考にして，ボール奪取や失点の予測器に基づきその期待値から守備の過程を評価する．

機械学習を用いたハンドボールの攻撃パターンの分類に関する予備的研究

市村　志朗（東京理科大学）

本研究の目的は，ハンドボールにおいて，経験の浅いコーチが選手の戦術的攻撃行動を理解する手助けをするために組織的な攻撃行動を分類するための機械学習で用いるデータセットを作成することであった．対象としたハンドボールの試合は，2019 年と 2021 年の男子ハンドボール世界選手権メインリーグから無作為に選ばれた 20 試合であった．これら 20 試合から組織的な攻撃行動 1,172 シーンを抽出し，組織的な攻撃行動を 24 種類に分類した．それぞれの組織的な攻撃行動を手書き描写し，画像データとして保存し，データセットとして作成した．さらに，学習効率を向上させるために，すべての画像を水平反転して複製し，データ拡張（2344 画像）を行った．各クラスについて，画像データの 85%を使用して教師あり学習モデルを構築するためのトレーニングに使用し，残りの画像データの 15%をモデル検証に使用した．これらの画像を使用した機械学習には Google の Teachable Machine が使用された．Teachable Machine の詳細設定は，エポック数を 50，バッチサイズを 16，学習率を 0.001 に設定とした．本研究では，24 種類の攻撃パターンを 89.3%の精度で分類することに成功した．これらの結果より，ハンドボールにおいて，組織的な攻撃行動を手書き描写したデータセットにて機械学習で画像分類を行うことにより，組織的な攻撃行動を分類することが可能であることが示唆された．ただ，より高い精度の達成のためには，さらなるデータとモデルのチューニングの必要性があることも示された．

ハンドボールのシューター軌跡統計分析手法の提案

内木　正紘（愛知工業大学）増田　健志（愛知工業大学）澤野　弘明（愛知工業大学）

本研究では，シューターの移動軌跡に基づくチーム別傾向分析の基礎検討を行う．筆者らはこれまでにハンドボール競技に特化したシュートイベントのタグ付けアプリを提案してきた．提案したアプリでは，シューターの移動軌跡，ポジション，成功有無の情報などを記録する機能を持つ．本稿では，このアプリを用いたチーム別の傾向分析の結果について報告する．具体的には，第 28 回男子世界選手権の決勝戦（デンマーク対スウェーデン）について分析した．それぞれのチームのシュート数はそれぞれ 33 本，28 本であり，成功率は 65.7%と 55.2%であった．デンマークの場合は，左バックのミドルシュートとポストシュートが全体の 30%と 24%であった．スウェーデンの場合は，左右のサイドシュートが 28%，フローターのミドルシュートが 35%であった．デンマークの移動軌跡を分析すると，左バックのシュートはすべてカットインシュートであることや，左バックからのアウトに流れながらのシュートはすべて外れていることが示された．

ハンドボール試合映像の得点シーン自動抽出手法の提案

増田　健志（愛知工業大学）内木　正紘（愛知工業大学）澤野　弘明（愛知工業大学）

ハンドボール競技では，試合を優位に進めるためにアナリストが相手チームを分析する．特に得点シーンを分析する際，映像中から得点が変化した時刻を目視で探し，攻撃が開始された時刻まで巻き戻して記録する必要があり，アナリストに負担がかかる．そこで本研究では，アナリストの分析支援を目的とした，試合映像から得点シーンを自動で抽出する手法を提案する．放送用のハンドボール試合映像はチーム名・試合時刻・得点数が表示されたスコアボードが存在する．また，スコアボードは映像中の決まった位置に表示され，スコアボードのチーム名は変化しない．試合時刻は毎秒変化し，得点数は数秒毎に変化する．これらの特徴から，スコアボードの位置と得点が推移した時刻を抽出する．その後，得点が推移した時刻の直前の映像に着目し，発表者の先行研究であるカメラ向き判定手法を用いて，カメラの向きが変化し，映像中にゴール物体が映り込んでから消えるまでの映像を得点シーンとして抽出する．国際大会の放送用試合映像 2 本に対して，提案手法で得点シーンを抽出した結果，得点シーン抽出精度は 90.2%であった．得点シーンを抽出して分析者に提示することで，分析時間の削減が期待される．

ハンドボールにおけるボール保持補助品の差異が投球腕のキネマティクスに及ぼす影響

難波　勇介（びわこ成蹊スポーツ大学）

ハンドボールでは，ボールを握る際に指先を滑りにくくすることを目的に，いくつかの「ボール保持補助品」が利用されている．国際的にはボール保持補助品として松ヤニが利用されているが，日本では必ずしも松ヤニを使用する場合ばかりではなく，両面テープが代替品として使用されている現状にある．本研究では，男子大学生ハンドボール選手を対象に，素手，松やに，両面テープの3条件によるボール保持補助品の差異が，シュート動作中の投球腕に及ぼすキネマティクス的影響を明らかにすることを目的とした.8台の3次元光学式モーションキャプチャー装置を使用し500Hzでスタンディングシュート動作の撮影を行った．得られた座標値から，ボール初速度，投球腕の関節角度，関節角速度を算出した．ボール初速度は，統計的に有意な主効果が見られた．肘関節最大伸展角度においては，統計的に有意な主効果は見られなかったものの，肘関節最大屈曲角度，肘関節屈伸可動域，肘関節角速度に統計的に有意な主効果が見られた．このことから，ボール保持補助品の使用により，肘関節の屈伸動作が大きくなり，その結果として，ボール初速度の差異が生まれていることが推察された.

ハンドボールにおける 7MT に対する GK の選択反応時間

下川　真良（大阪体育大学）田中 良（大阪体育大学）平川　武仁（大阪体育大学）

【目的】本研究は，ハンドボール競技を専門とする大学生のゴールキーパー（以下，GK）における7mスローの選択反応時間を比較検討することを目的とした.

【方法】測定参加者は男子大学生，GK の 4 名（能力順に GK1 から 4)，シューター（以下，SH）参加者 5 名（モデル 1・2・4：全日本インカレ 7m スロー未経験，3・5：全日本インカレ 7m スロー経験あり）それぞれが，上下左右方向に 4 本ずつシュートする映像に対する選択反応する課題であった．選択反応時間について，GK，SH，シュート方向（以下，DR）について，三要因分散分析した.

【結果及び考察】その結果，GK と SH の主効果が有意であった．また，SH と DR の交互作用が有意，GK と DR が有意傾向であった．主効果における多重比較の結果，GK2 よりも GK1・3・4 の選択反応時間が長く，SH2 よりも 3・5 に対する選択反応時間が長いことが認められた．SH と DR の多重比較の結果，右下で SH2 よりも 3・5，左下で 1・4 よりも 5，2 よりも 3・5，左上で 1 よりも 3，SH2 で左下よりも左上において，GK の選択反応時間がそれぞれ長いことが認められた．GK と DR の多重比較の結果，右上・左上・左下で GK2 よりも 1・3・4，右下で 2 よりも 1・3・4，1・4 よりも 3，GK3 で右上・左下よりも右下において，GK の選択反応時間がそれぞれ長いことが認められた．これらの結果は，ハンドボールの GK の選択反応時間と SH におけるそれぞれの特徴抽出を示す結果を示しており，実践指導に生かせる知見が得られたと考えられる.

男子ハンドボール競技におけるパッシブプレーの実態 -予告合図後のプレーに着目して-

田中　圭（トヨタ紡織九州株式会社）中山　紗織（筑波大学）小俣　貴洋（京都先端科学大学）

ハンドボール競技では，スピーディーなゲーム展開を目指して競技規則が変更されてきた．そのため現行の競技規則では，パッシブプレーの予告合図後，最大４回までパスが認められている．そこで本研究の目的は，予告合図前に完了した遅攻と予告合図を含む遅攻を比較することでパッシブプレーの実態を明らかにすることとした．日本リーグにおける拮抗した男子の試合を対象にゲーム分析を行った．その結果，全体的特徴として，予告合図ありの遅攻はなしよりも攻撃成功率が有意に低く（それぞれ約 33%，約 48%），1 回あたりの攻撃時間は有意に長かった（それぞれ約 43 秒，約 27 秒）．時間帯別における 1 回あたりの攻撃時間は，予告合図の有無に関わらず 0～20 分より 50～60 分が有意に短かった．時間帯別における遅攻の生起率において，予告合図ありはなしより 50～60 分が有意に高かった．すなわち，予告合図を含む遅攻は，攻撃成功率が低く，試合終盤では攻撃時間が短く，生起率が高いことがわかる．このことについて，攻撃時間から考えると，レフェリーによる予告の判定が一試合を通して一定の基準で行われていないと推察される．一方，攻防の内容から考えると，拮抗した試合の終盤において攻撃チームはより消極的に，あるいは防御チームはより効果的にプレーしていることが示唆された．

男子大学ハンドボール選手に見られた足趾近位趾節間関節脱臼の 1 例

花岡　美智子（東海大学）田村　修治（東海大学）

対象は 21 歳男性，左利き，ライトバック（以下 RB），競技歴 10 年のハンドボール選手である．2023 年 2 月に右第五趾近位趾節間関節付近に痛みを発症．近医を受診し同部の炎症が確認される．その後競技を続行していたが 2023 年 6 月頃痛みが増加し，テーピングを行いながら競技を続行した．インカレ後再度病院を受診し，画像所見において右第五趾近位趾節間関節の脱臼，剥離骨折と診断を受ける．2024 年 1 月時点で，保存療法にて復帰にむけてリコンディショニング中である．対象者は RB ポジションよりアウトからインへ切り返すカットインを得意としている．また左利きで RB ポジションであることから，右足を軸とした回り込み，右脚でのジャンプなど，プレー中右足にかかる負担が大きい．これらプレーにおいて，長期間にわたる足部外側部や小趾球付近への過度な負担が繰り返されたことで，骨の変形が生じ脱臼へ発展したと考えられる．対象者のアライメントを評価し，脚長差，重心位置のズレが認められた．現在主な主訴として切り返し動作や，第五趾背屈時の痛み，不安感がある患部への過度な負担を減らすべく，姿勢・重心位置の改善，動作改善のためのトレーニングを実施しており，本論文ではその経過，有効性について報告する．

レフェリーの客観的評価を目指して―判定目標値に関する考察-

清水　宣雄（一般社団法人ウェルスポーツ鴨川）

本研究の目的は，レフェリーの客観的評価基準の確立である．今回は，ポアソン分布を用いた目標数値の設定について考察した．先行研究では，競技規則の問題点を明らかにし，Infringement と Foul を区別することで,罰則の基準を分かり易くした.更に,判定数と主観的評価の関連性を求め，判定数の分布からレフェリーの数値目標を提案した．主観的評価と客観的評価の重回帰式を求めることを試みたが，十分な精度を得ることはできなかった．今回の研究では，試合においてレフェリーが下した判定の平均値から求められるポアソン分布の，統計的有意差を用いた目標数値が，平均値の変化によって，どの様に変化するのかを検証した．数値目標を設定することは，レフェリーのスキルアップに有意義であると考えられるが，基となる判定数の平均値を求めることは，容易ではない．平均値と目標数値の関連性が明らかになることで，平均値の推測から目標数値を定めることが可能となり，其々の大会・個人毎に数値目標を設定することができるようになる．努力目標が明確になることで，レフェリーのスキルアップに貢献できるのではないかと期待している．

大学ハンドボール選手はどのような選手をアスリートリーダーだと考えるのか

三石　祐馬（大阪体育大学大学院）田中　良（大阪体育大学）下川　真良（大阪体育大学）

本研究の目的は，ハンドボール部に所属する大学生アスリートはどのような選手をアスリートリーダーであると考えているのかについて調査することを目的とした．A 大学のハンドボール部に所属している男子選手 43 名,女子選手 41 名を対象に，先行研究で用いられているチーム内からアスリートリーダーを選出する手法を参照し，自チームからアスリートリーダーの定義に自身が当てはまると思うアスリートリーダーを最大３名選定した後に，その選手の選定理由について自由記述による回答を求めた．調査の結果，男子 16 名，女子 17 名の選手がアスリートリーダーの定義に当てはまる選手であると回答された．自由記述のデータを KJ 法を用いて分析した結果,【コミュニケーション】,【個人特性】,【統率力】,【ロールモデル】,【役職・ポジション】といった 5 つの大カテゴリーが生成された．これらの結果は他競技を対象とした先行研究の結果を支持するものであり，今後は，リーダーの成長の理論を参照し，選定されたアスリートリーダーはどのような経験を経て，リーダーとして成長していくのかに着目した研究が必要であると考える．

大学ハンドボール選手を対象とした身体能力・形態特性に関する研究

廣田　音奏（兵庫県立大学大学院）若葉京良（十文字学園女子大学）山田　盛朗（東京都市大学）
銘苅　淳（京都先端科学大学）石川　芽生子（関西学院大学大学院）

【目的】本研究の目的は，ハンドボールの競技特性に着目し大学ハンドボール選手の身体能力・形態特性について検討することであった．

【方法】被験者はK大学ハンドボール部男子26名と女子20名，計46名とした．身体能力として握力（非利き手/利き手），7mスロー球速，30m走，メディシンボール投げ，垂直跳びの測定をした．形態特性としてBMI，除脂肪量，ハンドリングキャパシティ（以下，HCと記す.）非利き手/利き手，胸囲，胴囲を測定した．分析には因子分析を用いて，因子負荷量0.6以上を分析の対象とした．

【結果と考察】因子分析の結果「無酸素性パワー発揮能力」「ボールコントロール能力/投捕能力」「幅育特性」の3因子が抽出され，第1因子から第3因子までの全分散に対する貢献度は81.014%であった．第2因子として分類されたHC（非利き手/利き手）に関して，大学ハンドボール選手のHCに関する研究はされておらず，HCがどのように競技力に影響するのかさらに検討する必要がある．今後，本研究の汎用性の検証と測定項目についてさらに検討する必要がある．本研究結果は将来的にハンドボールパフォーマンステストの開発に繋がると考える．

世界男子トップレベルのハンドボールにおける時間帯別のゲームパフォーマンス

加藤　亮介（筑波大学大学院）會田　宏(筑波大学)

本研究は，世界トップレベルの試合を対象として，時間帯別の得点と勝敗との関係性を明らかにすることを目的とした．2023年に開催された男子世界選手権の83試合を分析対象とした．データの収集には，国際ハンドボール連盟のホームページから得られる公式記録を使用した．まず，60分の試合時間を均等に6つに分割し，各時間帯(10分間)における得点と10分ごとに累積した時間帯における得点を，勝利チームと敗北チームに分けて記録した．次に，ロジスティック回帰分析を用い，時間帯別および累積時間帯別の得点と勝敗との関係性を検討した．その結果，6つの時間帯それぞれにおいて，勝利チームの得点と敗北チームの得点との間に有意な差が認められ，勝敗に影響を及ぼす時間帯は，30-40分が最も大きく，次いで0-10分，10-20分，50-60分，20-30分，40-50分の順に大きいことが明らかになった．また，10分ごとの累積時間帯における得点については，0-40分と0-50分の時間帯で，勝利チームと敗北チームとの間に有意な差が認められ，勝敗への影響は0-40分が0-50分より大きいことが明らかになった．これらのことから，30-40分における戦い方が勝敗に対して大きな影響を与える可能性が示唆された．

女子ハンドボール競技におけるバックコートプレーヤーのフェイントプレーの特徴
－日本，韓国，欧州トップレベルを対象にして－

三輪　将太郎（筑波大学大学院）藤本　元（筑波大学）

本研究では，女子ハンドボール競技において世界トップレベルのノルウェー，オランダ，スペインと日本，韓国を対象に記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて，攻撃様相の比較を行うとともに，バックコートプレーヤーの１対１状況におけるフェイントプレーの特徴を明らかにし，日本の国際的な競技力を向上させるために有用な知見を導くことを目的とした．その結果，攻撃様相，得点数，攻撃成功率，ミス率，シュート成功率のいずれにおいても，ヨーロッパ群とアジア群との間に差はなかった．また，有効なフェイントプレーの割合は，ヨーロッパ群がアジア群よりも有意に高いことが認められた．なおヨーロッパ群は遅い助走を用いて，中程度の距離でディフェンスと正面で対峙し，両足ストップで１対１状況を突破しようと試みていることが明らかになった．一方，日本は１対１状況でのフェイントプレーの生起数が最も少なかった．また，非利き手側ずれの位置で，遠い距離でのフェイントプレーを多用しているが，ディフェンスとの対峙を避けている可能性も考えられる．